認知語彙論への試み
――「やばい」をめぐって――

武内道子

1　序

(1) イチロー：こんなすばらしい仲間に出会えて，やばいっすね。

第1回WBCをともに戦い，チャンピオンになった後，インタビューでイチローが言ったことである。仲間は日本へ帰ろうとし，自分はアメリカに残ろうとしている場面であった。

それ以来，若い人が「やばい」をよい意味で使っている場面によく遭遇する。「やばいよ，この味」と言っていても，状況からは「腹痛を起こしそうだ」とか，「まずい」といった意味合いはない。同じ場面で「やっば! これ，うっま」とも言うことから，おいしさが際立っていると言う意味で使われているのである。

「やばい」はもともとは，盗人の隠語で，「つかまる恐れがある」と言った意味を表すが，現在では，口語で「自分に不利な状況が迫っている」といった少し広げた意味で使われている。たとえば，

(2) 授業サボっちゃって，今度の試験，やばいよ。

という具合である。

われわれは語によって，心にある自分の思考なり，頭にある概念なりを表示するということに異存はないだろう。同時に，心の中にある思考ないし概念という心的表示は，ちょうど文が語とその配列からなるように，しかし語彙項目とは異なるレパートリーの要素を結びつけて，百科事典的知識を作り，一つの塊として，あるいはファイルという形で，論理的内容と因果的関係からなる構造を持っていると言えよう。この心的概念を表す要素をwords of mentaleseと呼ぶことにする(Sperber & Wilson 1997; Carston 2002)。ひとつの概念が起こると，その概念の下に蓄えられている外界の対象物となんらかの因果関係を結ぶことになる。さらには，ひとつの概念が頭の中でさらなる表示を呼び出し，心的表示間の関係を結ぶことにもなる。

一方，たとえば，「同じ親から生まれた子供たち」と言う概念を考えてみると，論理的内容も百科辞典的内容もあるが，日本語では語彙として項目を持たない（cf. 英語ではsibling)。あるいは「犬」を猫や鳥と区別するときに使う意味と，個人が持つ「イヌ」という語の意味の関係はどうあるのだろうか。本論は，これら語と心的概念の関係に関して，語の意味は，心的概念を余すところ表すとは言えず，そういう概念形成のための基本的構築物（スキーマ）であるという関連性理論(Sperber & Wilson 1995: 以下S&W）の見解を提示しようとする。心的概念と，これを表す語との関係は，1対1の関係は望むべくもなく，前者のほうがずっと豊かで大きく，概念を乗せる（map）のに，語がいかにフレクシブルに調整されるのかということを考察する。

本小論は（1）や（2）における「やばい」の使用を取り上げ，当該の発話が関連性を持つのであれば，「やばい」という語で言おうとした二つの概念が，同じではないことは想像がつくのであるが，ではそのように特定の意味を持つものとして解釈される過程はどんなものかを提示しようとするものである。スキーマ的なメンタリーズとしての「やばい」から話し手の意図した解釈にいかにたどり着くのかということが問題となる。その過程

にいかに推論が駆使されるかが示されよう。その前に2節と3節で，発話の言語情報が話し手の伝えたい内容といかに隔たっているか，その隔たりを埋めるためにいくつかの語用論的推論によって言語的意味が補われる必要性を論じる。

2　話し手の意味と推論

一体，われわれはひとつの思考を相手に伝えようとして選択した言語表現は，どれほどのことを相手に伝えるのだろうか。逆に言えば，聞き手は手にした言語表現から，どれほどの思考内容を復元し，理解するのだろうか。(3) のやり取りにおける良子の発話について考えてみよう。

(3) 正夫：勉強してる？
　　良子：毎日疲れてね。

(4) 話し手は自分が毎日疲れていると主張している。

良子が病院で働いている看護婦で，医者の正夫は良子が正看護婦になるよう応援しているとしよう。正夫は良子の発話を，(4) のように良子が毎日疲れていると主張していると解読する。この情報そのものは正夫の問いに答えてはいない。しかしながら，正夫はこの情報を使って，彼の問いに答えているであろうという推論を働かせ，関連性の期待を満足させるのである。つまり，良子が（国家試験への）勉強ができないことと，その理由を伝達したと，正夫は理解する。S & W によれば，良子の発話は，良子の思考の証拠であり，良子は自分が疲れているという思いを意図的に聞き手である正夫の心の中に起こさせた (activate) と説明する。

聞き手の言語的解読化によって活性化された思考は，話し手が伝達しようと意図したメッセージの復元に導く推論過程のスターティングポイントとなる。この推論過程は文脈的情報と一緒になって (4) のような想定を導く。関連性理論では (4) を (3) の良子の発話の表意 (explicature) と呼ぶ。一方，正夫は自分の問いへの応答として，(5b) の想定を推論的結論として導き出す。

(5) a. 疲れていることは勉強できない理由となる。
　　b. 良子はまったく勉強していないだろう。

このとき，この推論的結論を導き出すために呼び出す (5a) のような文脈想定は推論的前提と呼ばれ，(5a) と (5b) は良子の発話の推意 (implicature) と呼ばれる。

しかし，このコンテクストにおいて，(3) の発話は (6) のような想定をも復元させるかもしれない。

(6) a. 良子は病院での仕事が忙しい。
　　b. 良子の勤める病院はいつも混んでいる。
　　c. 良子は正看護婦への国家試験に受かりそうもない。

(6a)－(6c) は，(5a) (5b) とともに，話し手が実際に口に出して言ったことではない。しかし，(3) の問いに対する応答として，聞き手である正夫は (4) の表意よりむしろ (5b) こそ話し手の伝えようと意図した内容であると解釈する。さらには，良子の表情が暗いということがあれば，「試験には受かりそうもない」と暗に伝えていることも，聞き手は復元するのである。(6a)－(6c) のような想定は弱い推意と呼ばれ，必ずしも話し手の伝達を意図した想定ではないということで，聞き手がより多く責任を持つものである。一方，(5) は強い推意である。

発せられた言語表現から活性化された思考（論理形式）と，推論による思考内容（表意と推意）は質的に極めて異なるものである。関連性理論の基本的主張は，明示的刺激としての発話が持つ意味は話し手が伝えたかった内容（話し手の意味）を，聞き手に伝える手がかりに過ぎないということである。上述したように，言語表現に乗せられた思考は極めて不完全で，断片的な，いわば骨と皮である。さらに，発話解釈は話し手の意味をさぐることであるが，その話し手の意味は二つに区別される。言語情報の不完全性を推論によって補

って表意に導くプロセスと，純粋に推論のみで伝えられた思考内容である推意を復元するプロセスである。両プロセスとも，関連性の原理（後述）に基づいた推論メカニズムで処理されると説明される。

前者の言語情報の不完全性を，関連性理論の枠組みで言語的意味決定不十分性（linguistic underdeterminacy）と呼ぶ。発話の言語情報が語用論的拡充作業（enrichment）を経て，ようやく話し手の明示的に伝達しようとした思考内容（what is said）に近づくという考え方である。この中には，構造的，意味的曖昧性の除去，指示表現の同定，省略されている要素の復元のほかに，次のような語用論的推論作業がある（Carston 2000; 2002; Wilson and Sperber 1993/1998 参照）[1)]。

(7) a. I like Sally's picture. [picture in what relation to Sally?]
b. I've had breakfast. [today]
c. I've been to Tibet. [in my life]
d. There are [appropriately] 100 people in the queue.
e. It'll take time for your knee to heal. [more time than you may expect]
f. He hit her and [as a consequence] she screamed.
g. [the man near the door is] Michael's father.
h. Confidentially, Sam is seriously ill. [I am telling you confidentially that]

カッコ内に示された，言語情報に含まれていない要素が語用論的推論によって補われて初めて，真偽の問える命題となり，話し手の伝達しようとしていた思考内容とほぼ同じくするレベル(表意)に達するのである。話し手の意味のうち，伝達の明示的側面に関して，すなわち，暗にではなく，言葉で伝達しようと意図した思考内容も，記号化されたものをはるかに超えていて，語用論的推論が不可欠であると関連性理論は主張したのである。

関連性理論の基本的な考え方は，関連性とその二つの原理に集約される。関連性とは認知過程への入力に関する特性として定義される。入力された情報（発話も含む）の処理によって何らかの認知上の改変，効果をもたらしたとき，その入力としての情報は関連性を有する。一方，その処理には，つまり効果を手に入れるためには，認知上の処理労力が含まれるものである。一般に，効果が大きければ大きいほど，入力情報の関連性は大きいと言え，処理労力が大きければ大きいほど，関連性は減じるのである。このことを基に，二つの関連性の原理を以下のように定義する。

(8) 関連性の認知原理
人間の認知システムは関連性の最大化に向けて作動する。

(9) 関連性の伝達原理
すべての意図明示的刺激はそれ自身の最適関連性の見込みを伝達する。

最適関連性（optimal relevance）というのは，次のように定義される。

(10) 最適関連性
a. その発話が話し手の能力と好みと相容れる範囲で，最も関連性の高いものである。
b. その発話は聞き手が処理するに値するだけの関連性を持つ。

相手に言葉を発することによって，その発話が(10a)と(10b)の条件を満たすものであると伝達しているとＳ＆Ｗは主張する。

これまでの議論から聞き手による話し手の意味の復元の過程には次の３ステップが含まれることがわかる。

(i) 論理形式を語用論的意味拡充を経て表意レベルへと発展させる。
(ii) 話し手の意図した文脈情報（推論的前提）を，発話の状況，話し手，聞き手の既存

の知識から呼び出す。

(iii) 話し手の意図した認知効果（推論的結論）を決定する。

この3過程は，(9) の関連性の伝達原理に基づいて，推論によって得られる。(i) から (ii)，(iii) へと順を追って解釈が進むという必然性はなく，同時に進む可能性も，(iii) がまず構築され (i) (ii) へと向かうことも，(ii) があって初めて表意構築が可能になることもある（たとえば橋渡し現象 (bridging))[2]。重要なことは，(i) の表意と (ii) (iii) の推意が相互作用しながら，オンラインに解釈過程が完結していくということである。4節で，「やばい」発話の解釈過程を例証していくが，アドホック「やばい」の意味が確立して初めて表意が得られること，すなわち推意の復元に表意の構築が必須であることを考察する。

3 心的概念と語の関係

前節で述べたように，話し手の思考を伝達するのに発話の言語的情報は極めて不十分なものである。このことは文についてだけではなく，語の使用についても言えることを提示する。

人間の思考に用いられる心的概念は常に，随時新たに創造される可能性があり，個人差もあるのに対して，語の意味は社会慣習的性格を持つので，その創造性は制約を受ける。限られた語彙の組み合わせからいかに話し手が思考を表示するのか，また聞き手が限られた語彙の組み合わせからいかに話し手の思考を読み取れるのかということが問題となる。Sperber and Wilson (1998) によれば，それは語の概念の語用論的調整作業によって可能になると考える。関連性理論の考え方は，たとえば，cat, open, sing, raw, happy といった語を含む発話において，各項目が記号として持っている概念は解釈過程へのスターティングポイントを提供し，その語彙概念を狭めたり，広げたりするプロセスによって，記号化されている意味とは多かれ少なかれ異なった概念にいたるというものである。言い換えると，記号化とは，その語の概念を余すところなく記号化しているとは考えず，ひとつの概念的領域をポイントすることである。つまり記号化されている意味は概念的スキーマであり，使用のたびに当該の概念が思考の表れとして推論されて構築されるという考え方である。自然言語の文は，思考言語の文 (mentalese) に言い換えられたものではなく，思考言語文を構築するためのスキーマを提供するということが，関連性理論の根底をなす考えである。しかしながら，手続きを記号化している代名詞や指示詞を別にすれば，たいていの語は思考の構築物となる原子的概念を記号化していると仮定されている。

語が記号化しているスキーマ的概念に取って代わったその場限りの概念を，アドホック概念 (ad hoc concept) と呼ぶ (Carston 1996; 2002 第5章)。これは表意形成にかかわる，すなわち命題の真理条件に貢献することになると考えられる。話し手は記号化されたスキーマ的概念を使って，記号化されていない，他と区別される概念を伝達するというのである。アドホック概念の特徴は，それが語用論的過程で，自動的に特定のコンテクストにおいて呼び出され，したがってこのコンテクスト限りのものであるということである。たとえば，話し手が「楽しかった」という語を使うとき，記号化されてはいないが，聞き手の概念的レパートリーの中に確立されている心的概念を伝達することになるのである。聞き手は，ハワイで二人が一緒に過ごしたくつろいだ夏の日と結び付けるかもしれない。その概念は「タノシイ」という語の持つ概念と共有された論理項目と百科辞典的項目を持つだろうが，語としての項目はない。当該の発話解釈の過程で聞き手が呼び出したもので，二度と再び使用することはないかもしれないのである。

以下，記号化されている概念については日本語の場合は「タノシイ」とカタカナ書きにし，英語の場合は HAPPY のように表記する。語用論的に構築されたアドホック概念を「タノシイ*」HAPPY* と表示して区別する。

では具体的に，(11) のイタリックの語が記号化している概念と話し手の伝達している概念を考えてみよう。

(11) I want to meet some *bachelors.*

話し手は仕事をしてきたけどそろそろ落ち着いて専業主婦になって子供を持ちたいという思いを表明しているコンテクストであるとしよう。この発話のBACHELOR*の概念は，記号化されている意味の「結婚していない成年男性」というプロコンセプトを狭めた結婚適任者といった概念であろう。したがってローマ法王や60歳以上の男性は含まれない。「うれしい」や'happy' など感情を表す語のほとんどが同様の「狭め（narrowing)」を語用論的に受ける，即ち特定化されると考えることが出来るかもしれない。次節で「やばい」も狭めの一例として考察する。

一般的に，多義語とされている語の概念は，常時狭めのプロセスを経て解釈されると考えられる。たとえば，次の一連の例にある「見る」というひとつの語は「ミル」という行為についてかなり異なる概念を伝達している（武内2005参照)。

(12) a. 絵を見るのが好き。
b. 味を見てくれる？
c. 両親の面倒はだれが見るんだい？
d. 外見で人を見るのはよくない。
e. 冷蔵庫を見てくれない？
f. 痛い目を見た。

「見る」が記号化しているのはスキーマ的概念（「ミル」）であり，これはほとんど無限に多くの概念を伝えるために使用されうると説明される。これらの概念すべてを辞書に載せることは不可能である。たとえば，「味わう」「世話する」のようにそのやり方を語彙化しているものもあるが，その場の概念の多くは語用論的に狭められて引き出されると考えるのである。

語彙概念の調整は，意味を狭めるだけでなく，「緩める（loosening)」方向でもなされる。

(13) a. My husband is a bachelor.
b. Mary is a bulldozer.
c. The fish is raw.

(13b) において，夫は結婚しているのに独身男のように振舞う人であることが復元されるが，ここでのBACHELOR*はプロコンセプトBACHELORから「結婚していない」という定義的意味を取り去ったものである。(11) の狭められたBACHELOR*と異なって，語彙概念の調整は緩められている。(13b) に見られるメタファーも語彙概念の緩めのプロセスの例として考えることが出来る。メアリーを記述するのであるから，BULLDOZERから「機械」という定義的特性を排除し，ブルドーザーの持つ確固とした概念がメアリーにあるとして解釈される。同様に (13c) においても，レストランで注文して持ってこられた魚はまったくの生ということではなく（魚屋で見かけるようなものは復元しない)，「料理されていない」というrawの持つ定義的特性を捨て，話し手の思っていた焼き具合に足りないことを意味する。

アドホック概念構築の根底にある考えは，人間の心的概念は弾力的であり創造的であるということ，人は頭の中の百科辞典的項目からいろいろの情報を呼び出してひとつの心的概念を形成するということである。言語的には与えられていないが，特定のコンテクストにおいて，関連性の期待に呼応して，オンライン的に形成され，発話の認知効果が達成された時点でそのプロセスは終わる。語の記号化されている意味は表意構築の手がかりに過ぎないのである。

4 「やばい」の意味と関連性

前節で紹介した関連性の伝達原理は次のような解釈過程を仮定している。聞き手は発せられたものの解読化によって構築された概念構造を，最小の労力を要する道筋をたどりながら，表意レベルにいたるまでこれを意味拡充し，かつこれを基に推意を復元し，その結果聞き手の関連性の期待にかなう解釈を得たところで解釈をやめる，というものである。本節は，この一連の手続きを「やばい」発話によって見ていき，発話解釈過程で「やばい」という語の意味が発話解釈にどう絡んでいくかを考察する。

まず，(14) のやり取りにおける正夫の発話を考えることからはじめよう。

(14) (論文の提出期限が迫っているところで)
良夫：論文，書けた？
正夫：やばいんだ。

良夫は正夫の発話を，正夫にとって状況が危ういと主張していると解読するとする。正夫にとって状況が危ういという情報自体は良夫の問いに対する答えにはならない。しかし，良夫は，自分の問いへの答えになるよう，したがって関連性の期待を満足させるよう推論を働かせる。もし彼が得た最初の想定が，正夫にとって危うい状況というのは彼が論文を書いていないことを意味するというのであれば，良夫はこの想定を推論的前提として，正夫が論文をまだ書けないでいるという結論を推意として導出してくれることを，正夫は意図したということになろう。良夫による正夫の発話の解釈には次のような想定が含まれていると考えられる。

(15) a. 正夫にとって危うい状況である。
b. 状況が危ういということは，論文が書けていないことを意味する。
c.正夫は論文が書けないと危うい状況に陥るだろう。

正夫は良夫の問いに，論文が書けていない，書けないと言うことによって，直接答えてもよかったのである。関連性理論によれば，(14) のように言うことによって，要求される余分の処理労力は余分の効果によって相殺されるということになる。すなわち，正夫は書けないことだけを伝えるのでなく，書けないことからくる結論をも伝達している。さらに，良夫は正夫の発話から，たとえば (16) に見られるようなもろもろの想定を推意として導出しうるのである。

(16) a. 正夫は単位を落とすかもしれない。
b. 正夫は卒業できないかもしれない。
c. 正夫は先生に叱られるだろう。
d. 正夫は予定している遊びに行けないのではないか。

これらの結論が，良夫にとって呼び出し可能であったとしても，正夫の発話によって生み出される特定の関連性の期待を満足させるものにはならない。正夫が良夫の問いに答えようとしているという事実こそが，良夫に，問いを発することによって求めている関連性の種類と程度を探らせるのである。

(14) の正夫の発話を，最小のルートを取りながら，意味拡充し（表意を構築し），(15b) と (15c) の推意を導出し，関連性の期待にかなう解釈にいたるという過程を示した。しかし，正夫の状況が危ういというだけの事実から，良夫は正夫が論文を書いていないことを正しく推論することはできない。(15b) と (15c) が正しく（つまり話し手の意図したように）導出されるためには，状況の危うさが特定されなければならないのである。すなわち，「やばい」によって正夫の意味していること，正夫が意図した「やばい」の意味が，意図された推意を保証するところまで拡充されなければならないということである。関連性の期待が特定の推意の導出を保証し，その推意が導出されるためには表意が適切に意味拡充されていなければならないのである。表意への拡充は，語彙調節のプロセスを経て，「やばい」という語が，そのプロコンセプト「ヤバイ」から話し手の頭の中にある心的概念（「ヤバイ*」）へと拡充されなければならないということである。

したがって，正夫は単に状況が危ういという命題以上のことを伝えようとしている。つまり，危うさは論文が書けないほどであり，書けないともっと危ういことになるということを，「やばい」の使用によって伝えているのである。当該の発話においてのみ通用する，特定化された概念を話し手は意図し，聞き手は推論による語用論的拡充作業を通してこれを復元することになる。(14) において，正夫の発話に続いて良夫が次のように言ったとしよう。

(17) それほどやばくはないよ。

良夫は正夫が危うい状況にあることを否定しているのではない。(17) で否定されていることは (14) の正夫の発話によって伝えられた危うさの程度 (「ヤバイ*」) なのである。したがって, (17) の「やばい」は,「ヤバイ**」として解釈されるものであると説明される。

「やばさ」の絶対的尺度はない。正夫が伝達していることは「やばさ」のその場限りの, おそらく二度と使用されないであろう「やばさ」加減の概念なのである。これは記号化されている「ヤバイ」の意味より, もっと特定的なものであり, 日本語に語彙化されていない概念である。話し手の心的概念として決して恒常的なものではなく, 聞き手の解釈した「やばさ」の概念も, このときのみ, 正夫の発話のみに適用されるものであると考えられる。この概念は, いろいろな言い換え, 説明によって記号化されうるが, 話し手が最初からもっていなかったと考える理由はない。正夫の発話は (18) と同じことであるが,

(18) 良夫：論文, 書けた？
正夫：何も書けなくて, やばいんだ。

(18) は明確な思考を伝える一方で, (14) の応答は, 聞き手に解釈の復元をかなり任せることになる。ポイントは, 正夫が Yes-no の問いに答えているという事実が語の意味調整をさせるのであるということ, つまり可能な推意の導出と推意を保証する表意の構築のために, 聞き手が行う拡充作業の範囲を狭めるために, まず語彙の意味調節作業があるということである。

次に, (1) の例によって,「やばい」の意味を考えてみよう。この場合, 表意は先行発話があるので極めて一般的に得られるが, 一連の推意は (14) と比べるとはっきりしないと思われる。

(1) (イチローが, WBC で優勝の後, インタビューで今の気持ちを尋ねられて)
こんなすばらしい仲間に出会えて, やばいっすね。

イチローの発話が, 聞き手にとって関連性があるとすれば, イチローが (14) の「やばい」とはまったく異なる概念を伝達していることになる。このコンテクストにおいて, すばらしい仲間に出会い, 今彼らと別れようとしている状況が「やばい」のである。推意として, たとえば次のような想定が漠然と導出されるかもしれない。

(19) a. イチローはすばらしい仲間と出会って幸せである。
b. イチローはすばらしい仲間と一緒に試合ができて幸せである。
c. 出会いは別れの始まりというが, すばらしい仲間と別れるのはつらい。
d. みんなも, すばらしい仲間だと思い, 一緒にプレーできて幸せだと思っているだろう。
e. 別れ別れになっても, WBC で一緒にプレーしたことは忘れないだろう。

(19) に示されたような (あるいはもっといろいろの) 結論が発話の推意であるとしても, それらはすべて弱い推意群である。話し手が意図したものかどうかは別として, それらが導出されるためには, 聞き手は発話の表意を確立しなければならない。推意の導出を保証するように, どの程度の「やばさ」なのか, 何がどんなふうに「やばい」のかについて, 話し手の意図しているところ (「ヤバイ*」) が復元されなければならない。普通の気持ちでいられないほど「危ない」といった方向で狭められ, 特定化されると考えられる。

(20) の「やばい」はどうだろうか。和子と正夫が鮨屋で食事をしているとしよう。

(20) 和子：このお寿司やばくない？

和子はこの店の寿司がまずくて中毒でも起こしそうだと意味しているのだろうか。それとも応えられないくらいおいしいと言いたいのだろうか。和子の寿司に対する評価は大部分, これまで時々正夫と行った鮨屋, あるいは家の近所の鮨屋で食べ

た寿司に基づいているものであろう。和子の発話が正夫にとって関連性を有するのは，和子が今寿司を楽しそうに食べているのか，まずそうに食べているのかいずれを推意するのかにかかっている。同時に，使用されている「やばい」について，意味の方向ないし範囲を示してはいるが記述はしていない特定化されたアドホック概念「ヤバイ*」を，正夫が復元することにかかっている。「やばい」という語の意味は，前者のコンテクストにおいて正夫が復元するのは「ヤバイ*」であり，一方後者においては，「ヤバイ**」である。発話の表意内容のみならず，推意の導出を保証するよう調整されるのである。

「やばい」の使用を少し異なる観点から考察してみよう。次の例は「やばい」が過去の事象について使われている。

(21) 良子：昨日彼氏と始めてデートしたんだって？どうだった？
和子：かなりやばかったのよ。
良子：うまくいくといいね。

(22) a. 彼氏はハンサムである。
b. 彼氏は和子の好みの男性である。
c. 和子は彼氏にまた会いたいと思っている。

これまでの考察から，「やばい」はその場との結びつきが強い表現のように思われる。事実，北原(2005, 98) も「カレー，おいしかった？」「うん，うまかった，やっべー」というような，その場を離れた思い起こしや報告にはあまり使わないと述べている。「やべーうまくなった」という副詞的使用も不自然であるということも指摘される。これらの事実から，「やばい」は感動詞的に使用されるという北原の指摘は的を得ていると考えてもいいかもしれない。しかしながら，ほめ言葉に使う「やばい」は感動詞のように使われるという言明は，受け入れがたい。第一に，感動詞のように使われるということは概念を記号化していると考えにくいということである。さらに，それが本来のマイナス評価での使用と区別されることにもなり，そうなると，多義であると主張していることになろう。

たとえば，次の例において，

(23) やばいよ，この味。
(24) a. 今度の試験やばいよ。
b. やばい，遅刻しそうだ。

(23) は (20) で例証したように，コンテクスト次第で，腐って食中毒を起こしそうな味であるとも，おいしさが際立っているとも解釈が可能である。(24a) (24b) の「従来」の用法と区別されるところは何もないであろう。

(21) の例に戻ると，良子の第2発話からわかるように，ほめ言葉として使用されている。発話の表意としては，「昨日会った彼は思っていたよりヤバカッタ*」というようなもので，推意として (22) に示されるような想定を復元したのであれば，聞き手は話し手の意図したやばさの種類と範囲（「ヤバイ*」）を正しく構築したのである。これは明らかに，期待はずれだったことを伝える「ヤバイ**」とは真理条件が異なるものである。つまり，過去というその場を離れた事象の記述に使用されるという事実は「やばい」が何らかの概念を記号化していることである。「やばい」は「疲れている」や「うまい」などと同じように，記号化している概念を伝え，かつ当該のコンテクストの中で足された，無限とも言うべき関連した別の概念を伝えうると考えるのが妥当であろう。

本節での議論は，発話解釈に推論が欠かせないというテーゼが与えられたら，語というのは記号化している最小の概念を超えて，さまざまな，関連する概念を伝えうるということを示すことであった。「やばい」の記号化している意味が語用論的にいかに意味調整され，そのスキーマ的概念を超えて，話し手の思考に近づくかを例証した。「やばい」はその時々，無限の区別される概念を伝達するのだが，これはわれわれの心的概念は，語よりもはるかに多いということの実証である。

5　結び—記号化された意味と伝達される思考

本小論の私の関心は，言語的意味決定不十分性の下，発話そのものも発話を構成する語も，話し手の伝達しようと意図した思考の一片の証拠であり，発話解釈の長い道のりのスターティングポイントであるということを示すことであった。

われわれの心的概念は言語にある語よりはるかに多い。語としての確立は，語がその言語を使用する成員のものという性格上，手間ひまかかるものであるが，一方個人の心的概念は，他人との相互調整の問題ではなく，個人の中の記憶や知識との関係であるから，比較的制約を受けないのである。このような中でのことばによるやり取りを考えたとき，そこに含まれる概念と語とのペアリングの調節作業は関連性理論のような認知理論こそが説明しうるものである。

良夫に論文が書けたかと尋ねられて，正夫がやばい状態にあると発したとき，正夫の発話は一連の弱い推意群の導出を保証することと呼応して，その明示的意味を確立する。良夫が構築するやばさのアドホック概念は，正夫の心的概念とまさに同じものであるとは考えられないが（話し手が正確に意図した推意ではないから），それでも伝達は成功する。良夫の拡充したやばいさと正夫の心にあったやばいさは種類も程度も異なっているかもしれない。両者の意味の隔たりにもかかわらず，伝達は成功したのである。関連性理論の考えは，伝達というのは決して話し手の心的概念の写し（duplication）を手に入れるのではなく，意図されているのは，そして達成されるものも，きわめてルーズなレベルであるというものである。

思考というのは，一方では，形式の記号化（encodability）の問題であり，一方には形式の伝達能力（communicability）の問題がある。ほとんどの心的概念は表明・表示され得ないと思える一方で，ほとんどの概念は表示され得るのである。二つのレベルを取り持つのは語用論的推論であり，認知上の問題として説明・解明されるべきことである。

注

1）武内（2002）は，論理形式から表意へいたる語用論的作業全般について解説している。

2）橋渡し現象とは次のような発話解釈に見られる。

（ア）Peter: Did you enjoy the picnic yesterday?
　　Jane: The beer was warm.
（イ）The beer was part of the picnic.

（ア）においてJaneの発話の‘the beer’がbridging referenceと呼ばれる定名詞句指示表現で，Peterの発話にはその直接先行詞はないが，間接先行詞として‘a picnic’が候補である。そこで，‘the beer’の指示対象を確立するために（イ）のような想定が必要となる。これは上記（ii）の推論的前提である。ポイントは，推論的前提があって初めて，表意構築過程の一部である‘the beer’という指示表現の同定が可能になるということである（松井2003参照）。

参照文献

Carston, R. 1996. Enrichment and loosening: Complementary processes in driving the proposition expressed? *UCL Working Papers in Linguistics* 8. 61-88.

Carston, R. 2000. Explicature and semantics. *UCl Working Papers in Linguistics* 12. 1-44.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford: Blackwell

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words.* Cambridge, Ma: Harvard University Press.

北原保雄（編）.『続弾　問題な日本語』2005. 大修館書店.

松井智子. 2003.「関連性理論：認知語用論の射程」『人工知能学会論文誌』18巻　5号. 1-10.

Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.

Sperber, D. and D. Wilson. 1997. The mapping between the mental and public lexicon. *UCL Working Papers in Linguistics* 9. 1-20.

武内道子. 2002.「言語形式の明示性と表意」『英語青年』第48巻　第4号240-241（2002年7月号36-37）.

武内道子. 2005.「関連性への意味論的制約ー「しょせん」と「どうせ」をめぐって」武内道子（編）.『副詞的表現をめぐってー対照研究』ひつじ書房. 63-87.

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. Pragmatics and time. Carston, R. and S. Uchida（eds.）1998. *Relevance Theory: Applications and Implications.* Amsterdam: John Benjamins. 1-22.